

岡本韋庵『日本維新人物志』訳註抄（一）

有馬卓也

目次

はじめに

凡例

訳註抄

夏偕復序

岡本監輔自序

一、大久保利通 二、川路利良 三、野津鎮雄

四、得能良介 五、大寺安純 六、坂本八郎太

七、中村敬宇

はじめに

本稿は岡本が明治三六年に金港堂より出版した『日本維新人物志』（以下『人物志』と略記）（註1）に取り上げられた明治人を取り上げて訳注を施していくものである。明治三四年に清国で出版された前身とも言うべき『大日本中興先覚志』（以下『先覚志』と略記）（註2）（杭州開導社）と同様、本書も清国の読

者を意識していたようであり、夏偕復の序に

「吾が国民、受けて之を読めば、即時にして考へ、人を挾びて従ひ、善く愛国の精神を用いて、大いに排外の心力を張らん。二十世紀の吾が支那の国民、益を岡本氏の書に獲んこと、豈に鮮少ならんや」

とあるほか、清人向けの注釈的記述が随所に施されている。そしてここに「排外の心力」を張るための書であるとの位置づけは注目すべきであろう。また、日清戦争以降、清国の改革をものはや期待せず、日本自身が西欧帝国主義と同様に清国分割政策に乗り出そうとしていた中であつて、依然として清国改革を主張・期待する岡本の立場も注目に値しよう（註3）。

『人物志』に収録された人物は二三〇名を超え、『先覚志』の三五名をはるかに凌駕する。以下に両書の目次を示しておこう。

『先覚志』目次

上巻：徳川公斉昭・藤田東湖・梁川星巖・藤森天山・佐久間象山・堀田正睦・島津公斉彬・西郷隆盛・僧月照・僧月性・梅田雲濱・頼三樹三郎・橋本左内・吉田松陰・金子孫

三郎・大橋訥庵・堀利照

下卷…宮部鼎藏・真木和泉・平野二郎・有馬新七・中山公子忠光・川上弥一・清水精一郎・武田耕雲齋・久坂玄瑞・高杉晋作・月形洗藏・野村望東・駒井躋庵・武市瑞山・坂本龍馬・大村益次郎・岩山公具視・三条公実美

『人物志』目次(『先覚志』と重複する人物(註4)には傍線を付した)

第一卷 常陸…徳川斉昭・藤田東湖・猪飼吉左衛門・安島帯刀

附茅根泰・黒澤阿時・金子孫次郎父子・高橋多一郎

父子・有賀半弥伊藤軍兵衛諸人・平山兵介兒島強

助諸人・武田耕雲齋藤田小四郎諸人

越前…松平春嶽・橋本左内

薩摩…島津斉彬・日下部伊三次・有馬新七附柴山愛次

郎諸人・西郷隆盛・横山正太郎・大久保利通・川路

利良・野津鎮雄・得能良介・大寺安純・坂本八郎太

士佐…武市瑞山・僧智隆・坂本龍馬・岩崎弥太郎・後

藤象次郎

第二卷 山城…頼三樹三郎・浮田一攔・小林良典・姉小路公知

・中山忠光・津崎村岡・岩倉具視・三条実美・有栖

川宮熾仁親王

若狭…梅田雲濱

但馬…田中綏猷父子諸人

摂津…僧月照信海兄弟

美濃…梁川星巖

信濃…佐久間象山・山本貞一郎・田中平八・浅田宗伯

三河…松本奎堂

備前…藤本鉄石

筑後…真木保臣・中垣健太郎

筑前…平野次郎・月形洗藏・江上栄之進・野村望東

肥後…宮部鼎藏・永島三平・横井小楠・佐田介石

肥前…鍋島直正・原忠順

阿波…美馬援藏

第三卷

長門…山田又助・前田孫右衛門・周布兼翼・吉田松陰

・宍戸真壤・川上彌一白石廉作諸人・森重菊二郎・

水井精一山本誠一高橋正都・久坂元瑞・高杉晋作・

木戸孝允

周防…僧月性・大村益次郎・河村文菴属甚五衛門・白

根多助

豊前…英彦山座首・政所坊政所有錦・義俊坊渋川順道、

如藏坊安達昇・浄現坊鬼谷嘆・祐玉坊柏木民部・中

坊安部豪逸等諸人

対馬…大浦和礼諸人

近江…川瀬太宰・森喜左衛門高橋作也諸人

因幡…八尾徳右衛門・仙石左太雄附長尾郁三郎高松平

十郎・吉田直人河田景与諸人・洋剛介増井熊太二人
・松田道之

加賀…駒井隣庵・不破富太郎松平鉄太郎等諸人・東方

芝山・河波豊太郎

第四卷

武蔵…藤森天山・大橋訥庵・安積五郎・羽倉簡堂・飯

泉喜内・勝野豊作父子・堀利熙・岩瀬忠震・川路聖

謨・小栗上野介・塩谷岩陰・古賀茶溪・山岡鉄舟・

中村敬宇・僧行誠・布川玉尊・榊原健吉附平山兵原

男谷精一郎

日向…安井息軒・谷村計介

陸中…三好監物

越後…下野勘平佐佐耕菴諸子

備中…山田方谷・緒方洪菴

下総…堀田正睦・佐藤舜海

磐城…平山省齋

越中…斎藤弥九郎

両書ともに水戸を第一とする所に岡本の認識を知ることができ
る。この点については先に言及した註⑤の「どこ」では多くを
論じないが、維新とその後の展開に水戸の人材（徳川斉昭・会
沢正志斎・藤田東湖から桜田・坂下に至るまで）とその精神（尊
王論・国体論など）を重視する立場である。

また収録された人々に目を移すと、既に故人となった者を掲
載の対象にしているようだが、黒田清隆・福沢諭吉・森有礼な
ど入ってしかるべき人物の名が見られない。これは岡本の明治
国家建設に対する認識を知る上で重要なポイントとなろう。

本稿で取り上げる人物は『先覚志』では取り上げられなかつ
た人物で明治期以降に活動の中心があつた者たちとする。これ
によつて、岡本の明治人に対する評価が明らかにできると同時
に、明治国家へ期待していたものも多少なりとも理解できるの
ではないかと考える。

―註―

（一）四国大学附属図書館所蔵。

（二）有馬所蔵。本書については「岡本韋庵『大日本中興先覚志』訳註（一

～四）」（徳島大学紀要言語文化12～15・2004～2007）を掲載した。ま

た「岡本韋庵『大日本中興先覚志』について」（徳島大学紀要言語文化

16・2008）を発表した。

（三）岡本は『亜細亜之存亡』においてより明確にそれを主張している。こ

れについては拙稿「岡本韋庵『亜細亜之存亡』について」（徳島大学国語

国文学19・2006）で言及した。

（四）重複する人物は内容もほぼ等しい。

（五）註2既出。

凡例

一、該本は明治三六年刊。金港堂。漢文（句点のみ）。四卷二冊。
四国大学附属図書館蔵。

一、本訳註は原文・書下し・註の順に記してある。

一、書下しの句読点、及び『』は筆者が施したものである。
一、誤字は訂正して注記した。

一、旧字・俗字は新字に改めた。

一、本書に掲載されている人物の註は省略した。

訳註抄

（一）では、夏偕復と岡本の序、及び明治政府で辣腕を振った大久保利通、日本における警察の基礎を築いた川路利良、西南の役で功績のあった野津鎮雄、日清戦争で功績のあった得能良介・大寺安純・坂本八郎太といった薩摩出身者、さらに洋学から漢学に帰した中村敬字を挙げる。

夏偕復序

歐洲史家之言曰「十九世紀、有二主義。曰民主主義。曰國家主義。」甲所以恢復個人自由之權利、乙所以固合同種之内力、以張

大其排外之運動者也。是故由乙之說而推之、排外者、固國民之精神、而立國之基礎也。雖然、有文野之殊焉。文者運之以心力、野者運之以腕力。地球之人類、自太古以及今日、有血氣者、皆有排外之思想、排外之運動。其始也皆以腕力爭、腕力平均、輔以心力。於是心力優者勝、心力絀者敗。其大較也、世界日進、諸種之民族、由野而趨文、由腕力而趨心力。泊乎今日、幾乎純以心力爭矣。日本自我咸豐之間米艦請市以來、志士奮興、人材蒸蔚。比而觀之、可分二輩。傾幕府者為一輩。昌言尊攘、意在鎖國。此在當時、未識世界之運會、未覩萬國之實況、近於以腕力爭者也。佐維新者為一輩。革新政體、固合民力、師人之長、力謀進步、壇坫雍容、而日本國際上拒受之權、已完全而無缺矣。所謂以心力爭者也。相提而論、後者似勝于前者。然而大化周流、鼓鑄豪傑、非其時則其人不出。後者前之所生、前者後之所藉。使前之一輩、不倡尊攘、則幕府不傾、政體不立、後之一輩、不主革新、則志士愛國之心、皆為蠻野慘毒之具。知人論世、固未可以優劣論也。茫茫大陸、立于其上、為國民者、觀歷史之遷流、鑒文野之判別、可以知天運之所在、人力之所自矣。岡本氏日本之續學者也。憤而著書、蒐集其國近五十年人物之事實、為『維新人物志』。將以餽餉吾之國民。吾國民受而誦之、即時而考、招人而從、善用愛國之精神、大張排外之心力。二十世紀之吾支那國民、獲益於岡本氏之書、豈鮮少哉。支那仁和夏偕復叙。

歐洲史家の言に曰く「十九世紀に二主義あり。曰く民主主義、曰く國家主義」と。甲は個人自由の權利を恢する(註1)所以、乙は同種の内力を団合して、以て其の排外の運動を張大にする所以の者なり。是が故に、乙の説に由りて之を推せば、排外は固に國民の精神にして、立國の基礎なり。然りと雖も、文野(註2)の殊なるあり。文は之を運ぶに心力を以てし、野は之を運ぶに腕力を以てす。地球の人類は、太古より以て今日に及ぶまで、血氣ある者は皆排外思想・排外の運動あり。其の始や皆腕力を以て争ひ、腕力平均すれば輔くるに心力を以てす。是に於て心力の優なる者は勝ち、心力の細なる者は敗る。其れ大較(註3)なり。世界日々進み、諸種の民族、野に由りて文に趨り、腕力に由りて心力に趨る。今日に泊びて、純に心力を以て争ふに幾し。日本は我が威豊(註4)の間に米艦の市を請ふてより以來、志士奮興し、人材蒸く蔚なり。比して之を觀れば、二輩に分つべし。幕府を傾くる者を一輩と為す。尊攘を昌言し、意は鎖國に在り。此れ當時に在りては、未だ世界の運會を識らず、未だ万国の実況を覘はずして、腕力を以て争ふ者に近きなり。維新を佐くる者を一輩と為す。政体を革新し、民力を団合し、人の長ずるものを師とし、力めて進歩を謀り、壇坫(註5)雍容として(註6)、日本の國際上の拒受の權は、已に完全として缺なし。所謂心力を以て争ふ者なり。相提して論ずれば、後者は前者に勝るに似たり。然れども大化の周流は、鼓して豪傑を鑄し、其

の時に非ざれば則ち其の人物です。後者は前の生ずる所、前者は後の藉する所なり。前の一輩をして尊攘を倡へざらしめば、則ち幕府傾かず、政体立たず。後の一輩をして革新を主とせざらしめば、則ち志士愛國の心、皆、蛮野慘毒の具と為る。人を知り世を論ずるは、固に未だ優劣を以て論ずるべからざるなり。芒々たる(註7)大陸、其の上に立ち、國民の為にする者は、歴史の遷流を觀、文野の判別を鑒み、以て天運の在る所、人力の自らす所を知るべし。岡本氏は日本の續字(註8)者なり。憤して書を著し、其の國の近五十年の人物の事實を蒐集し、『維新人物志』と為す。將に以て吾が國民に餽餉せん(註9)とす。吾が國民、受けて之を読めば、即時にして考へ、人を扱びて従ひ、善く愛國の精神を用いて、大いに排外の心力を張らん。二十世紀の吾が支那の國民、益を岡本氏の書に獲んこと、豈に鮮少ならんや。

支那 仁和 夏偕復叙す

—註—

- (1)回復する、の意。
- (2)文明と野蛮。
- (3)大いなる法則。
- (4)清國の年号。一八五一—一八六一。
- (5)外交場裡のこと。
- (6)威嚴あるさま。

(7) 宏大なさま。

(8) 「積字」の誤りか。

(9) 食糧を贈ること。

岡本監輔自序

予始生天保十年。蠢蠢動息猶人也。年十歲。服農耕、旁讀書。始知海表有万国。後數年。厭耕脫走京阪、訪諸名家。及幕府捕斬諸藩志士、頗疑時勢衰替。尋遊江戸、与当世志士交。常以偏主開鎖者、為失當無策、而多悲其中心憂國者也。窃謂「莫知如開拓北辺、創新大邑。奉宗室親王、招天下不平之徒、講折衝禦侮之策。」數建議幕府、不省。遂至一周柯太全島、以圖拓殖事宜。然未懷倒幕之念也。及幕府再起征長兵、始知其不可為。幸不食粟於幕廷也。未幾大政維新、復七百余年之墜緒。与宇内各国人相見、因上籙辺説于朝再三。遂官箱館裁判所、赴任柯太。閱四十年。猶欲保北境、鞅掌數年。遂不得酬素志。乃退從事教育者二十年。又創千島義會。而忽致一敗塗地矣。嗚呼身會開明之運、而用心不純、依然故吾、無奈朋友不信。他日蓋棺、未知為何狀、其獲罪于盛世也大矣。抑予好著述。無不執筆輒悩困、及拓地告敗益甚、欲書之售、不欲不售、不售且不省也。思為蠹魚抱故紙、未若航絕域葬魚腹、而殆不能焉。若有天命、不亦甚可愍乎。属者有感、余生不能五十。乃又冀次天保十年至今偉人・傑士・奇

節・卓行、各立之伝。開港鎖國、尊皇翼霸、所見雖各殊、至其中心憂國則一也。其人皆与予前後生、而有大関乎維新者也。因命之曰『維新人物志』。夫編年則嫌於扞難、分類則失於支離。乃謂「寧從編年次第耳。」友人藤波某甫持分類之説。因分為忠誠・憤激等十數目。又欲立拓殖・安辺等伝。則如徳川斉昭・島津斉彬二公、能言遠略。亦為氣運所抑遏。而先進豪傑林友直・間宮倫宗等事跡、寢微寢浪、不得不謂之世無其人也。姑付度外、以示老友重野成斎。成斎曰「執一大概全体、不可也。幕府則幕府、諸藩則諸藩、分類編年、不亦可乎。」予於是恍然有省。因從國別法、存分類意、編年序列、明其顛末。行文或用名字、或称号、或爵位、体例不一。未加論贊。詳其是非得失。余所識者、舉事實以証之。使人有所感發興起、庶乎得為盛世臣民。而情農偷生之罪亦得償矣。雖死于道路、亦何怨乎哉。死生命也、富貴天也。非余所知也已。

明治三十六年 韋庵岡本監輔撰

予始め天保十年に生まる。蠢蠢として(註)動息し猶ほ人のごとし。年十歳。農耕に服し、旁ら書を読む。始めて海表に万国あるを知る。後數年。耕を厭い京阪に脱走し、諸名家を訪ぬ。幕府の諸藩の志士を捕斬するに及び、頗る時勢の衰替するを疑ふ。尋いで江戸に遊び、当世の志士と交はる。常に偏に開鎖を主とする者を以て、失當無策と為す。而るに其の中心憂國を

悲しむ者多し。窃に謂らく「北辺を開拓し、大邑を創新するにしくはなし。宗室の親王を奉じて、天下の不平の徒を招き、折衝禦侮の策を講ぜん」と。数しば幕府に建議するも、省みられず。遂に柯太全島を一周し、以て拓殖の事宜を画するに至る。然れども未だ倒幕の念を懷かざるなり。幕府の再び征長の兵を起すに及び、始めて其の為すべからざるを知る。幸いに粟を幕廷に食ます。未だ幾ならずして、大政維新し、七百余年の墜緒(註2)に復す。宇内各国の人と相見え、因りて藩辺(註3)を上し、朝に説くこと再三。遂に箱館裁判所に官たりて、柯太に赴任す。閱すること四年にして罷む。猶ほ北境を保たんと欲するも、鞅掌(註4)なること数年。遂に素志に酬ゆるを得ず。乃ち退きて教育に従事する者二十年。又千島義会を創る。而るに忽ち一敗して地に塗れるを致す。嗚呼、身は開明の運に会ふも、用心、純ならず、依然として故吾(註5)なり。朋友の信ぜざるを奈ともするなし。他日蓋棺のとき、未だ何の状と為るかを知らず。其の罪を盛世に獲るや大なり。抑も予は著述を好むも、筆を執れば輒ち悩み困しまざるはなし。拓地の敗を告ぐるに及べば益ます甚だし。書の售るるを欲し、售れざるを欲せざるも、售れず且つ省みられず。蠹魚の抱く故紙と為るを思へば、未だ絶域に航して魚腹に葬らるるにしかず。而るに殆んど能くせず。若し天命あらば、亦甚だ慙むべからざらんや。属者感ありて、余生は五十なるあたはざるも、乃ち又天保十年より今

に至るまでの偉人・傑士・奇節・卓行を彙め次し、各おの之が伝を立つ。開港・鎖国、尊皇・翼霸、見る所は各おの殊なると雖も、其の中心の憂国なるに至りては則ち一なり。其の人皆予と前後して生まれ、而して大いに維新に関わる者あるなり。因りて之に命じて『維新人物志』と曰ふ。夫れ編年は則ち扈雜なるを嫌ひ、分類は則ち支離に失す。乃ち謂らく「寧ろ編年次第に従ふのみ」と。友人藤波某、甫め分類の説を持す。因りて分ちて忠誠・憤激等の十数目と為す。又拓殖・安辺等の伝を立つ。則ち徳川斉昭・島津斉彬二公の如きは、能く遠略を言ふ。亦氣運の抑遏する所と為る。而して先進の豪傑林友直・間宮倫宗等の事跡は、微に寝み泯ぶに寝む。之を世の其の人を無すると謂はざるを得ざるなり。姑く度外に付して、以て老友重野成斎に示す。成斎曰く「一分を執りて全体を概するは不可なり。幕府は則ち幕府、諸藩は則ち諸藩とし、分類編年するは、亦可ならずや」と。予、是に於て恍然として省みるあり。因りて国別法に従ひて、分類の意を存し、編年もて序列し、其の顛末を明らかにす。行文、或は名字を用い、或は号を称し、或は爵位もてし、体例一にせず。未だ論贊を加へず。其の是非得失を詳にす。余の識る所の者は、事実を挙げて以て之を証す。人をして感発して興起する所あらしめ、盛世の臣民と為るを得んことを庶ふ。而して惰農偷生の罪註も亦償ふを得ん。道路に死すと雖も、亦何ぞ怨まんや。死生は命なり、富貴は天

なり。余の知る所に非ざるのみ。

明治三十六年 韋庵岡本監輔撰

—註—

(1) うぐめく様。

(2) ここでは衰えていた王政をさす。

(3) 辺境の軍事計画のこと。

(4) 仕事が多いこと。

(5) 世の変化について行けない昔のままの自分、の意。

(6) 農業の勞を厭い、為すべき時に何も為さなかつた自分の罪、の意。

一、大久保利通（薩摩）

大久保利通。称市蔵。号甲東。鹿児島藩士也。自幼沈黙。不苟言笑。常为一郷群兒魁首。自称曰天皇組。組猶隊也。稍長、状貌魁偉、声音宏壮。性剛毅、臨事果敢。嘗与西郷隆盛・吉井友実等、就禅学者隈元某修座禅三年。有心得。仕藩、累進西城側役。及將軍徳川家茂上書請解政權、以要朝廷、利通勸廷臣從之。及薩藩士斬英人於生麦、幕府命薩藩、使老臣某詣大阪開命。意在督償金。藩議使某称病、以利通代之。利通至、元老久世大和守某廷之面諭云云。利通佯為耳聾者曰、「幕府欲討我藩乎。我藩有備。不敢避。」元老以為誤解、再三弁之。利通遂称逆上而退、帰告藩主、大修海防。自是從事尊攘有年。方維新初、建議遷都

大阪。四月。朝於行在。上召見賜坐。藩士陸見、是為嚆矢。閏四月。為参与。与木戸孝允・広沢真臣・副島種臣等輔翼太政。人仰其風采。時余与清水谷侍從公考等屢見利通於太政官、說蝦夷二島之急。未幾、朝廷置箱館裁判所、公考為總督、薩人井上石見任判事、余任權判事。蓋利通等推举也。明年利通擢参議、賜祿千八百石、叙從三位。是歲、露人侵擾柯太、余爭之、不聽。遂南上奏請。時鍋島公閔復為開拓長官。余与島義勇等任開拓判官。余見利通、縷述急務。利通使余就義勇謀。余心不服。見義勇責其慢。義勇怒、余殊不為意。明年。利通遷大藏卿。五年。岩倉公具視使欧米各國、利通為之副使。蓋以攘夷論未息、時或有殺外人之事、而外交梗難。既帰、為内務卿。七年。佐賀乱起。利通受命征之、事立平、斬江藤新平・島義勇等。是歲朝議討台湾生蕃。清國有違言。秋八月。命利通為全權弁理大臣、使清國。既至、与其大臣恭親王等會議、經久不決。時余在北京、見利通、陳清人猜疑之状、非剛斷不可動。利通使余見其從官陸軍大佐福原和勝。既而清國出銀四十万両、償我兵費。十一月二十六日。利通至自清國、士民揭國旗歡迎。翌日、天皇臨御太政官、利通以使事聞。既而戸孝允帰山口、板垣退助帰高知。復古功臣漸將分離。利通深憂之。与二子会於大阪協商、遂俱入東京。尋二子復任参議。十年丁丑。西南乱起。利通急赴西京行在所、参征討機務。事平乃帰。叙勲一等、賜旭日大綬章、叙正三位。十一年戊寅夏五月十四日。将朝、驅馬車、車中閱官書。行抵紀尾井坂、

有賊拔刀斬馬足。利通大声叱曰「止。」賊辟易。利通徐懷官書、將下車、賊斬其頭。馬卒走告於警舍。賊遂害利通。賊則石川鼎士島田一郎。蓋西鄉隆盛黨云。利通時年四十九。事聞、天皇震悼、贈右大臣正二位、進其子為華族、賜金厚葬之。維新後諸藩士身贈官正二位、其家列華胄者、以利通為始。

論曰「利通於維新為元勳、母待論已。顧其規模或未宏遠。而果于自信。是其所以致禍敗。居常與人談、以見己長。則其過人也遠矣。」

大久保利通。稱は市藏。号は甲東。鹿兒島藩士なり。幼きより沈黙。苟も言笑せず。常に一郷群兒の魁首たり。自ら稱して天皇組と曰ふ。組は猶ほ隊のごときなり。稍長じ、状貌魁偉、声音宏壮なり。性、剛毅にして、事に臨みて果敢。嘗て西鄉隆盛・吉井友美等と、禅学者隈元某に就きて座禅を修むること三年。心得することあり。藩に仕へ、西城の側役に累進す。將軍徳川家茂の上書して請ひて政權を解きて以て朝廷に要むるに及び、利通、廷臣に勧めて之に従はしむ。薩藩士、英人を生妻に斬るに及び、幕府、薩藩に命じて老臣某をして大阪に詣りて命を聞かしめんとす。意は償金を督せしむるに在り。藩、議して某をして病と称せしめ、利通を以て之に代はらしむ。利通至り、元老久世大和守某、之を廷して面諭して云々。利通、伴りて耳聾者と為りて曰く「幕府、我が藩を討たんと欲するか。

我が藩は備あり。敢て避けず」と。元老以て誤解と為し、再三之を弁す。利通、遂に逆上すと称して退き、歸りて藩主に告げ、大いに海防を修めしむ。是より尊攘に従事すること年あり。方に維新の初め、大阪に遷都するを建議す。四月。行在に朝す。上、召見して坐を賜ふ。藩士の陛見するは、是を嚆矢と為す。閏四月。参与と為る。木戸孝允・広沢真臣・副島種臣等と太政を輔翼す。人、其の風采を仰ぐ。時に余は清水谷侍従公考等と屢しば利通に太政官に見え、蝦夷二島の急なるを説く。未だ幾ならずして、朝廷、箱館裁判所を置き、公考が総督と為り、薩人井上石見が判事に任ぜられ、余は権判事に任ぜらる。蓋し利通等の推挙するならん。明年、利通は参議に擢んでられ、禄千八百石を賜はり、従三位に叙せらる。是の歳、露人、柯太を侵擾し、余之と争ふも聴かれず。遂に南上して奏請す。時に鍋島公閑更、開拓長官たり。余、島義勇等と開拓判官に任ぜらる。余、利通に見え、續しく急務を述ぶ。利通、余をして義勇に就きて謀らしむ。余、心に服せず。義勇に見え其の慢なるを責む。義勇怒り、余殊に意と為さず。明年。利通、大藏卿に遷さる。五年。岩倉公具視、欧米各国に使し、利通、之が副使と為る。蓋し攘夷論の未だ息まざるを以て、時に或は外人を殺すの事ありて、外交梗難す。既に帰り、内務卿と為る。七年。佐賀の乱起る。利通、命を受けて之を征し、事立ちどころに平げ、江藤新平・島義勇等を斬る。是の歳、朝議して台灣の生蕃を討つ。

清国、違言あり。秋八月。利通に命じて全権弁理大臣と爲し、清国に使せしむ。既に至り、其の大臣恭親王等と會議し、久しきを経るも決せず。時に余は北京に在りて利通に見え、清人の猜疑の状ありて、剛断するに非ずんば動かすべからざるを陳ず。利通、余をして其の従官陸軍大佐福原和勝に見えしむ。既にして清国、銀四十万兩を出し、我が兵費を償ふ。十一月二十六日。利通、清国より至り、士民、国旗を掲げて歓迎す。翌日、天皇、太政官に臨御し、利通、使事を以て聞す。既にして木戸孝允は山口に帰り、板垣退助は高知に帰る。復古の功臣、漸く將に分離せんとす。利通、深く之を憂ふ。二子と大阪協商に会し、遂に俱に東京に入る。尋いで二子、復參議に任ぜらる。十年丁丑。西南の乱起る。利通、急ぎ西京の行在所に赴き、征討の機務に參ず。事平げ乃ち帰る。勲一等を叙せられ、旭日大綬章を賜はり、正三位に叙せらる。十一年戊寅。夏五月十四日。將に朝せんとし、馬車を駆け、車中に官書を閱す。行きて紀尾井坂に抵り、賊ありて抜刀して馬の足を斬る。利通、大声して叱して曰く「止めよ」と。賊、辟易す。利通、徐に官書を懷にし、將に車より下りんとするに、賊、其の頭を斬る。馬卒走り、變を警舎に告ぐ。賊、遂に利通を害す。賊は則ち石川県士島田一郎なり。蓋し西郷隆盛党と云ふ。利通、時に年四十九。事聞せられ、天皇震悼し、右大臣正二位を贈り、其の子を進めて華族と爲し、金を賜ひて厚く之を葬らしむ。維新の後、諸藩士の身

に官正二位を贈られ、其の家を華胄(註一)に列する者は、利通を以て始と爲す。

論に曰く「利通を維新に於ける元勲と爲すは、論を待つことなきのみ。其の規模を顧みるに、或は未だ宏遠ならず。而るに自信に果たり。是れ其の禍を致す所以なるか。居りて常に人と談ずるに、以て己の長を見す。則ち其の人を過ぐることを遠し」と。

―註―

(一)ここでは華族をさす。

二、川路利良(薩摩)

初称正之進。号龍泉。旧鹿兒島藩士也。嘗為西郷隆盛所器重、戊辰伏見之役、率一隊与東軍戰于竹田。有殊功。及官軍東下、随隆盛收江戸城、先衆入城。時幕臣不平之徒、抛東台謀回復。名曰彰義隊。五月。利良与諸将率兵、自三枚橋進、破黒門而入。賊兵潰走。利良乃東征、平若松乱。帰藩為兵器奉行。三年。出拜東京府大属、累進邏卒総長。皆係隆盛推薦云。明治五年壬申。以警保助航欧洲。查究各国警察事例而帰。上疏曰「君主独裁之国、不得不重警察。而崇君權者、不可不取範於露・德・法三国以蔽警察。願倣三国例規、置警察署於東京、举京中警察之事、帰其長官掌握。府県則使知事兼掌之。」政府納其議、置警視庁于

東京、隸内務省。先是司法省管全国警察之事。利良援各国例駁之曰「司法与行政自別。闔国警察之事、固非司法專管所及。故各国皆有内務省、以統府県警察之事也。」又曰「邏卒之職、平時專任警察、有事、執戎器鎮暴乱。故各国皆取之於軍人。我国幸有士族在。宜取之。且人民損害、莫大於火災。故防火之事、宜歸諸警察。」官皆從之。尋拜警視長官。於是廢邏卒番人、增巡查數、區画京中、排置支署、架電線以通声息、設消防別隊、以救失火。又設河海警察。於是盜火害大減。利良又察圍圍傷害人命、大改定獄則云。又嘗建議、大訓練巡查、以備非常。山口・佐賀之乱、鎮靖勦捕、与有力焉。明治十年。鹿兒島之變、亦從軍有殊功。初隆盛主張征韓、不行、辭帰故山、利良反復諫止、不聽。与内務卿大久保利通議、遣部下察其動靜。隆盛私学党惡之、声言曰「利良与利通謀、遣刺客窺隆盛。」遂举兵反。二月。利良拜陸軍少將、為征討旅団司令長官。帥部下三千西下、転戦于肥薩間。遂入鹿兒島、奮戰決闘、大小七十余合。終奪賊兵根拠。部下士皆其所訓練、刀銃並用、所向皆勝。敵兵大畏之。七月。帰京。以功叙勲二等、賜旭日重光章、賜金五百円。十二月。奉旨再赴欧洲、考查警察事例。而船中疾作、抵法京益劇。明年十月。帰朝。天皇使侍医問疾。終不起。是為十二年十月十三日。天使臨其家、賜祭菜金二千元、賜遺族五千元。利良尽力職務、常居警視官舎、三年不曠一日。無他嗜好。唯以事務修学為快樂。其臥病于海外也、督勵從行諸員、使期成功。嘗語人曰「本邦政事、

無一出欧洲右者。唯欲使警察法冠絶万国耳。」利良為人、胆壯氣剛、當事不避險艱。而接人温和、有如婦女。慈仁愛物、見部下死于職者、歎賞垂泣、損私財以贈之。更設弔慰法、凡為職務死傷者、庁内官吏、互出金以賑恤之。利良自幼修文武、受擊劍于長沼某、經書于重野安繹・水野成美等。傍及詩歌云。

論曰「利良殆偉人也。余与重野氏極稔。又知水野氏。而不得見川路氏。聞其風而欽慕焉。意者境遇不同、學術或異之所致歟。」初め正之進と称す。号は龍泉。旧鹿兒島藩士なり。嘗て西郷隆盛の器重する所と為り、戊辰伏見の役に、一隊を率いて東軍と竹田に戦ふ。殊功あり。官軍の東下するに及び、隆盛に随ひて江戸城を収め、衆に先んじて城に入る。時に幕臣の不平の徒、東台に抛りて回復を謀る。名づけて彰義隊と曰ふ。五月。利良と諸將と兵を率いて、三枚橋より進み、黒門を破りて入る。賊兵潰走す。利良乃ち東征し、若松の乱を平ぐ。藩に帰りて兵器奉行と為る。三年。出でて東京府大属に拜せられ、邏卒総長に累進す。皆隆盛の推薦に係ると云ふ。明治五年壬申。警保助を以て欧洲に航す。各国の警察の事例を査究して帰る。上疏して曰く「君主独裁の国は、警察を重んぜざるを得ず。而して君權を崇ぶ者は、範を露・德・法の三国の以て警察を嚴にするに取らざるべからず。願はくは三国の例規に倣ひて、警察署を東京に置き、京中警察の事を挙げて、其の長官の掌握に帰せん。府県は則ち知事をして之を兼掌せしめん」と。政府、其の議を納

れ、警視庁を東京に置き、内務省に隸せしむ。是より先は司法省、全国警察の事を管す。利良、各国の例を援し、之を駁して曰く「司法と行政とは自ずから別なり。蘭国警察の事は、固より司法專管の及ぶ所に非ず。故に各国は皆内務省にありて、以て府県警察の事を統ぶるなり」と。又曰く「邏卒の職は、平時には警察に専任し、有事には戎器を執りて暴乱を鎮む。故に各国は皆之を軍人より取る。我が国は幸に士族の在るあり。宜しく之より取るべし。且つ人民の損害は火災より大なるはなし。故に防火の事は、宜しく諸を警察に帰すべし」と。官皆之に従ふ。尋いで警視長官に拜せらる。是に於て邏卒番人を廢し、巡查の数を増し、京中を区画して支署を排置し、電線を架けて以て声息を通ぜしめ、消防別隊を設けて以て失火を救はしむ。又河海警察を設く。是に於て盜火の害、大いに減ず。利良、又圍圉（註）の人命を傷害するを察し、大いに獄則を改定すと云ふ。又嘗て建議して大いに巡查を訓練し、以て非常に備ふ。山口・佐賀の乱に、鎮靖（註）と勦捕するに与りて力あり。明治十年。鹿兒島の変に、亦従軍して殊功あり。初め隆盛の征韓を主張して行はれず、辞して故山に帰らんとするや、利良反復して諫止するも聴かれず。内務卿大久保利通と議し、部下を遣りて其の動靜を察せしむ。隆盛の私学党、之を惡み、声言して曰く「利良と利通と謀り、刺客を遣りて隆盛を窺はしむ」と。遂に兵を挙げて反す。二月。利良、陸軍少將に拜せられ、征討旅団司令

長官と爲る。部下三千を帥いて西下し、肥・薩の間に転戦す。遂に鹿兒島に入り、奮戦決闘すること、大小七十余合。終に賊兵の根拠を奪ふ。部下士は皆其の訓練する所にして、刀銃並び用い、向ふ所皆勝つ。敵兵大いに之を畏る。七月。京に帰る。功を以て勲二等を叙せられ、旭日重光章を賜はり、金五百円を賜はる。十二月。旨を奉じて再び歐洲に赴き、警察の事例を考查せんとす。而るに船中に疾作り、法京に抵りて益ます劇す。明年十月。帰朝す。天皇、侍医をして疾を問はしむ。終に起たず。是れ十二年十月十三日たり。天使、其の家に臨み、祭案金二千円を賜ひ、遺族に五千円を賜ふ。利良は職務に尽力し、常に警視官舎に居り、三年に一日も曠しくせず。他に嗜好なし。唯だ事務修学を以て快樂と爲すのみ。其の病に海外に臥すや、従行の諸員を督励し、成功を期せしむ。嘗て人に語りて曰く「本邦の政事は、一も歐洲の右に出づる者なし。唯だ警察法をして万国に冠絶たしめんと欲するのみ」と。利良の人と爲りは、胆壯氣剛にして、事に當るに陰艱を避けず。而るに人に接するに温和にして、婦女の如きことあり。慈仁ありて物を愛し、部下の職に死する者を見れば、歎賞して泣を垂れ、私財を損して以て之に贈る。更に弔慰法を設け、凡そ職務の為に死傷せし者は、庁内の官吏、互に金を出して以て之を賑恤す。利良は幼より文武を修め、擊劍を長沼某に、經書を重野安禪・水野成美等に受く。傍に詩歌に及ぶと云ふ。

論に曰く「利良は殆ど偉人なり。余は重野氏と極めて稔あり。

又水野氏を知る。而るに川路氏に見ゆるを得ず。其の風を聞きて焉を欽慕す。意おもふに境遇同じからずんば、學術或は致す所を異にするかな」と。

一註

(一)牢屋のこと。

(二)しずめやすんじること。

三、野津鎮雄（薩摩）

野津鎮雄。初称七郎左衛門。世仕薩摩侯、未甚顯。幼失怙恃、為叔父某所養。胆勇絶倫、膂力兼人。善擊劍、好佩長刀。兼通砲術。文久三年癸亥。英艦來攻。鎮雄守沖兒島砲墩、戰甚烈。衆推為首功。明治元年戊辰。為小隊長、戰于鳥羽、有功。遂為東山道先鋒、戰于總野岩陸、困若松城、拔之。明年。進大隊長、討箱館賊。四年。藩敵新兵、率之上京。拜兵部省出仕、任陸軍大佐。兼兵部權大丞。五年。任陸軍少將。七年三月。佐賀人為乱。鎮雄為步砲二兵指揮長官、急赴熊本鎮台。十九日。与内務卿大久保利通駕艦、達博多港。土人多欲応叛者。鎮雄建策、即日上陸、布宮画界以守、勅諸宮按部、毋得妄動。乃下令曰「敢入者斬。」於是人心始定、衆皆翻然帰順。因用其人、使從役。二十一日。向佐賀發。大呼競進、賊兵望風遁走、不出旬日而乱平。

上遣侍臣慰勞之。賜酒肴、大賞其戰略。自維新後、發徵兵令、未嘗用之于戰、諸藩士族侮蔑之、以為不可恃、至是天下始信徵兵可用矣。尋有鹿児島之乱。西鄉隆盛為渠魁、肥・筑人心之。鎮雄嘗為熊本司令長官、後転東京鎮台。於是將第一旅団兵、自筑前向肥後。世人多以鎮雄与隆盛親善、謂戰必不力。賊困熊本城。部署諸將援之、毅然不顧。揚鞭馬上指麾而進。大戰于田原坂。呼声動天地。对壘五十余日。使賊一步不得出南関。困久不解。糧竭士饑。大励諸隊曰「城兵陷没、在於旦夕、而不能救之。九泉之下、無恥同胞乎。」刻期奮發奮擊、困竟得解。及賊敗走、鎮雄勒兵徐行、搜捕遺竄、使勿再起。其行軍有節制。不務出奇、戒輕進者。故能收全勝之功。待人豁達、不問細事。其在熊本鎮台也、有士族來謁者、每置酒款接、飲語如親友、以消其不平之氣。去後有神風党之變。人服其有不可及者。不止將略云。処事必熟思反復、中夜不寐、得心所安而後止。十年。詔賞其功、叙勲二等、賜旭日重光章、給歲俸金六百円。十一年。任陸軍中將。十二年。叙十四位。十三年。車駕西巡、勅使扈從、未發而疾作。七月二十二日没。享年四十有四。天皇悼惜、詔贈正三位。弔賻賑恤、恩礼有加。中興以後、武官陞正三位、自鎮雄始。西南之役罷、乃帰修邸第于四谷門内、以田原坂樹、為客堂柱楣。樹身乱點砲丸如蜂窠。題其上曰「硝雲鉛雨。」常戒家人、勿忘昔時貧窶。栽蔬園中、斟家釀、以自娛云。配大山氏。無子。弟道貫亦任少將。

論曰「鎮雄転戦行間、屢奏奇績、功高不伐。可謂純節之士也。至其安不忘危、貴不忘賤。尤深於讀書養氣之功焉。」

野津鎮雄。初め七郎左衛門と称す。世よ薩摩侯に仕ふるも、未だ甚だしくは顕ならず。幼くして怙恃(註一)を失ひ、叔父某の養ふ所と爲る。胆勇絶倫にして、膂力人を兼ね。擊劍を善くし、好みて長刀を佩ぶ。兼ねて砲術に通ず。文久三年癸亥。英艦来り攻む。鎮雄、沖兒島の砲墩(註二)を守り、戦ひ甚だ烈なり。衆、推して首功と爲す。明治元年戊辰。小隊長と爲り、鳥羽に戦ひて功あり。遂に東山道先鋒と爲り、総野岩陸の門に戦ひ、若松城を囲み、之を抜く。明年。大隊長に進み、箱館の賊を討つ。四年。藩、新兵を献じ、之を率いて京に上る。兵部省出仕を拝せられ、陸軍大佐に任ぜらる。兵部権大丞を兼ね。五年。陸軍少将に任ぜらる。七年三月。佐賀人、乱を爲す。鎮雄、歩砲二兵指摩長官と爲りて、急ぎ熊本鎮台に赴く。十九日。内務卿大久保利通と艦に駕し、博多港に達す。土人の叛に応ぜんと欲する者多し。鎮雄、策を建て、即日上陸し、營を布き界を画して以て守り、諸營に勅して部を按じ、妄りに動くを得ることなからしむ。乃ち令を下して曰く「敢て入る者は斬る」と。是に於て人心始めて定まり、衆皆翻然として帰順す。因りて其の人を用い、従役せしむ。二十一日。佐賀に向ひて発す。大呼して競い進み、賊兵、風を望みて遁走し、旬日も出でずして乱平ら

ぐ。上、侍臣をして之を慰勞せしむ。酒肴を賜ひ、大いに其の戰略を賞す。維新より後、徵兵令を発し、未だ嘗て之を戦に用いざれば、諸藩の士族、之を侮蔑し、以て恃むべからずと爲すも、是に至りて天下始めて徵兵の用うべきを信ず。尋いで鹿兒島の乱あり。西郷隆盛、渠魁と爲り、肥・筑の人、之に応ず。鎮雄は嘗て熊本司令長官と爲り、後に東京鎮台に転ず。是に於て第一旅団兵を將いて筑前より肥後に向ふ。世人、多く鎮雄と隆盛と親善たるを以て、戦は必ず力めざらんと謂ふ。賊、熊本城を囲む。部署の諸将、之を援け、毅然として回顧せず。鞭を揚げて馬上に指麾して進む。大いに田原坂に戦ふ。呼声、天地を動かす。壘に対すること五十余日。賊をして一步も南関より出づるを得ざらしむ。困、久しく解けず。糧竭き士饑う。大いに諸隊を勵まして曰く「城兵陥没し、旦夕に在りて、之を救ふあたはず。九泉の下(註三)、同胞に恥づることなからんや」と。期を刻して齊しく発して奮撃し、困、竟に解くを得。賊の敗走するに及びて、鎮雄、兵を勅して徐行し、逋竄せしを搜捕し、再起することなからしむ。其の行軍は節制あり。務めて奇に出でず、^{かるがる}しく進む者を戒む。故に能く全勝の功を収む。人々を待つこと輒達にして細事を問はず。其の熊本鎮台に在るや、士族の来り謁する者あらば、毎に酒を置きて款接し(註四)、歛語すること親友の如くし、以て其の不平の氣を消す。去りて後に神風党の変あり。人、其の及ぶべからざる者あるに服す。将略

を止めずと云ふ。処事は必ず熟思反復し、中夜も寐ねず、心に安んずる所を得て而る後に止む。十年。詔して其の功を賞し、勲二等を叙し、旭日重光章を賜ひ、歳俸金六百兩を給す。十一年。陸軍中將に任ぜらる。十二年。十四位を叙せらる。十三年。車駕西巡し、勅使・扈從の未だ発せずして疾作る。七月二十二日。没す。享年四十有四。天皇、悼惜し、詔して正三位を贈る。弔賻・賑恤、恩礼加ふるあり。中興以後、武官の正三位に陞るは、鎮雄より始まる。西南の役罷み、乃ち歸りて邸第を四谷門内に修するに、田原坂の樹を以て客堂の柱楣と爲す。樹身に砲丸を乱點すること蜂窠の如し。其の上に題して「硝雲鉛雨」と曰ふ。常に家人を戒めて、昔時の貧窶を忘るることなからしむ。蔬を園中に栽え、家釀を斟み、以て自ら娛むと云ふ。配は大山氏。子なし。弟道貫も亦少將に任ぜらる。

論に曰く「鎮雄は行間に転戦するに、^{屢し}ば奇績を奏し、功高不伐たり。純節の士と謂ふべきのみ。其の安に至りて危を忘れず、貴くして賤を忘れず。尤も読書・養氣の功に深し」と。

—註—

(1) 父母のこと。

(2) (1)では砲台のこと。

(3) 死後の世界。あの世。

(4) うち解けて接すること。

四、得能良介（薩摩）

得能良介。名通生。号薰山。其先出南朝忠臣之裔。世仕鹿児島藩。良介生而孤。幼穎敏、異于群兒。及壯遊歷諸州。明治元年。從藩主上京、与西郷・大久保諸氏尽力国事。三年。任大蔵大丞。七年一月。擢紙幣頭、兼任大丞。先是政府欲造紙幣以助国用、置紙幣寮。而廣造紛錯、庶民懷疑。廷議欲更造之以易旧鈔。將託日耳曼人製造之。良介謂「甚失国体、禍且不測。」乃築工場、分爲整理・彫刻・製肉・刷版・調査五局、罷官吏爲傭使。每局分部、嚴禁交通。立約終身從事于此、青年者、特免兵役。購器械于海外、聘西人爲教師。日夜巡視、乃知用紙未善。外国製質脆、而邦產易於摩損。因剞抄紙局于王子村、招工人於越前。於是紙爲輸出產之一宗矣。十年一月。廢寮爲局。良介任書記官、爲紙幣局長。二月。西南役起、急製紙幣。十一月。上幸工場、賞其功勞。十一年。改紙幣局、爲印刷局。從良介議也。十二年。伊太利皇帝贈勲章。十六年。叙勲三等。時病肺、上遣侍医存問。十二月。病革。特旨叙從四位。二十七日。終於印刷局官舎。享年五十九。

論曰「紙幣行而我国之円法正、良介之功多。明治二年。余在柯太、指廳全島。從僚屬議、發紙券。約可五千円。皆押余姓名。人或謂之擅制。余見良介弁之、事遂白。良介称余善濟急。余於是益服其通達事務矣。」

得能良介。名は通生。号は薰山。其の先は南朝忠臣の裔に出づ。世よ鹿兒島藩に仕ふ。良介は生れて孤たり。幼くして穎敏にして、群兎に異なる。壮に及びて諸州を遊歴す。明治元年。藩主に従ひて京に上り、西郷・大久保諸氏と国事に尽力す。三年。大蔵大丞に任ぜらる。七年一月。紙幣頭に擢んでられ、大丞に兼任せらる。是より先、政府は紙幣を造り以て国用を助けんと欲し、紙幣寮を置く。而るに贗造紛錯し、庶民懷疑す。廷議して更に之を造り以て旧鈔に易へんと欲す。將に日耳曼人に託して之を製造せんとす。良介おも謂らく「甚だ国体を失すれば、禍且に測られず」と。乃ち工場を築き、分ちて整理・彫刻・製肉・刷版・調査の五局と為し、官吏を罷めて備使と為す。局毎に部を分ち、交通を嚴禁す。約を立てて終身此に従事し、青年は特に兵役を免ずとす。器械を海外に購ひ、西人を聘して教師と為す。日夜巡視し、乃ち用紙の未だ善ならざるを知る。外国製は質脆もろくして邦産は摩損し易し。因りて抄紙局を王子村はじに創め、工人を越前より招く。是に於て紙は輸出産の一宗と為る。十年一月。寮を廢して局と為す。良介は書記官に任ぜられ、紙幣局長と為る。二月。西南の役起り、急ぎ紙幣を製す。十一月。上、工場に幸し、其の功勞を賞す。十一年。紙幣局を改めて印刷局と為す。良介の議に従ふ。十二年。伊太利皇帝、勲章を寄贈す。十六年。勲三等を叙せらる。時に肺を病み、上、侍医を

して存問せしむ。十二月。病革す(註1)。特旨して従四位に叙す。二十七日。印刷局の官舎に終はる。享年五十九。

論に曰く「紙幣行はれて我が国の円法の正さるるは、良介の功多し。明治二年。余、柯太に在りて、全島を指麾す。僚属の議に従ひて紙券を発す。約五千円なるべし。皆余が姓名を押す。人或は之を擅制と謂ふ。余、良介に見えて之を弁じ、事遂に白す。良介、余を善く濟急すと称す。余、是に於て益ます其の事務に通達するに服す」と。

——註——

(1) 病が危篤になること。

五、大寺安純(薩摩)

大寺安純。称弥七。旧鹿兒島藩士也。幼喪父。折節讀書学劍。年二十。為藩学句読師。時藩改兵政、取長泰西。乃感激辞職為兵卒。日担銃劍而步趨。慶応戊辰伏見之變、帥兵奮戰。尋轉戰奥羽間。以功為半隊長。後進陞大尉。明治六年癸酉。大將西鄉隆盛唱征韓、不行、怒辞去。安純見隆盛、諄諄諫之、笑而不答。乃止。八年。従都督西郷従道征台湾、凱旋。為中隊長。十年。西南之變、力戰有功。陞大佐。二十七年。奉命遊歐洲、觀察其兵勢国力。会征清役起、議選第一師団參謀長。中將山地某建議。「舍大寺無可者。」乃急召還安純。九月二十三日。為參謀長。従

山地某転戦于金州・旅順。旅順天險、二日而拔之。安純之力居多。就戦地拜少将、任第六師団第十一旅団長。乙未一月。率旅団攻威海衛。連戦連勝、遂迫其險要百尺崖。励衆大闘、一挙拔塁。是日敵丸中身者四。終不起。初安純在広島、不参大本営軍議。人怪而問之。曰「我唯知戦闘耳。会議紛紛何為。」時捷報日至、而未聞大捷。安純曰「将官不死、士氣不振、諸将無恙、非吉兆也。」安純為人個儼不羈。方面獐狎、人一見知其為猛将云。論曰「安純以戦死為勝算所在。足為千古将帥之鑒。武臣而愛錢者、能不愧安純乎。」

大寺安純。称は弥七。旧鹿兒島藩士なり。幼くして父を喪ふ。折節して書を読み劍を学ぶ。年二十。藩学の句説師と為る。時に藩、兵政を改め、長を泰西に取る。乃ち感激して辞職して兵卒と為る。日々銃劍を担いて步趨す。慶応戊辰の伏見の変に、兵を帥いて奮戦す。尋いで奥羽の間に転戦す。功を以て半隊長と為る。後に進みて大尉に陞る。明治六年癸酉。大将西郷隆盛、征韓を唱へて行はれず、怒り辞して去る。安純、隆盛に見え、諄諄として(註一)之を諫むるも、笑ひて答へず。乃ち止む。八年。都督西郷従道に従ひて台湾を征し、凱旋す。中隊長と為る。十年。西南の変に、力戦して功あり。大佐に陞る。二十七年。命を奉じて歐洲に遊び、其の兵勢国力を観察す。征清の役の起るに会し、議して第一師団参謀長に選ばれる。中将山地某、建議す。

「大寺を^お舎きて可なる者なし」と。乃ち急ぎ安純を召選せしむ。九月二十三日。参謀長と為る。山地某に従ひて金州・旅順に転戦す。旅順は天險なるも、二日にして之を抜く。安純の力、居ること多し。戦地に就きて少将に拜せられ、第六師団第十一旅団長に任ぜらる。乙未一月。旅団を率いて威海衛を攻む。連戦連勝し、遂に其の險要の百尺崖に迫る。衆を励まして大いに闘ひ、一挙に塁を抜く。是の日、敵丸、身に中る者四。終に起たず。初め安純の広島に在りしとき、大本営の軍議に参せず。人怪しみて之に問ふ。曰く「我は唯だ戦闘を知るのみ。会議の紛紛たるに何をか為さんや」と。時に捷報(註二)の日に至るも、未だ大捷を聞かず。安純曰く「将官死せずんば、士氣振るはず。諸将の恙なきは吉兆に非ざるなり」と。安純の人と為りは個儼(註三)にして不羈。方に獐狎(註四)に面すれば、人、一見して其の猛将たるを知ると云ふ。

論に曰く「安純は戦死を以て勝算の在る所と為す。千古将帥の鑒と為すに足る。武臣にして錢を愛する者は、能く安純に愧ぢざらんや」と。

— 註 —

- (一) ていねいなこと。
- (二) 勝利の報告のこと。
- (三) 物事に拘束されないこと。
- (四) あらあらしいこと。

六、坂本八郎太（薩摩）

坂本八郎太。鹿兒島藩士也。幼而穎悟。耽讀書。明治四年。入海軍兵學寮。十年。卒業、乘某艦討鹿兒島賊徒。任少尉補。自是乘各艦航各國、有年。任少佐、叙從六位。賜勳四等瑞宝章。二十七年。補赤城艦長。七月。与清國有隙。赤城艦主砲、僅受六百二十三噸。尤称微力。八郎太謂「若受命警備内地、則是終身遺憾也。」大憤慨謂知友曰「我際千載一遇之秋、不得奉命派遣戰地、則当自尽耳。如敵艦定遠・鎮遠等、宏大堅牢。固称東洋無比。我能決死当之。衝突船艙、毀損艦體、則其失戰鬪力也必矣。」既而奉派遣之命。大喜曰「吾尽死力達宿志之時至矣。」九月十七日。戰于大孤山洋。先諸艦奮進、望敵縱橫突擊。勢若奔獅。定遠諸艦果失戰鬪力。頃之敵流丸中八郎太身。大呼曰「進。」乃斃。有一火夫、見敵彈損蒸汽管。蒸汽漏泄、將減速力。脱己衣以塞之。汽力峻烈、不可支持。因自衣上緊抱、以膚肉防之。纔獲止漏。一艦為之感動奮勵、遂大奏奇功。蓋其將卒皆入死地、無所回顧也。八郎太死時、年四十有一。母氏年六十余。寓東京芝区城山坊。得訃從容曰「為國家拋身命、軍人本分耳。前者首途、已誓不期再会矣。」

論曰「八郎太用心、以為千古軍人之規範也。余嘗謂「器械之備、不若兵士之精。大艦之寡、不若小艦之多。」

坂本八郎太。鹿兒島藩士なり。幼くして穎悟。讀書に耽^{ふけ}る。

明治四年。海軍兵學寮に入る。十年。卒業し、某艦に乗りて鹿兒島の賊徒を討つ。少尉補に任ぜらる。是より各艦に乗りて各國に航すること年あり。少佐に任ぜられ、從六位に叙せらる。勳四等瑞宝章を賜はる。二十七年。赤城艦長に補せらる。七月。清國と隙あり。赤城艦の主砲は、僅かに六百二十三噸を受くるのみ。尤も微力と称す。八郎太謂^{おも}らく「若し内地を警備するを受命せば、則ち是れ終身の遺憾なり」と。大憤慨して、知友に謂ひて曰く「我、千載一遇の秋に際し、戦地に派遣するを奉命するを得ずんば、則ち当に自ら尽くべきのみ。敵艦の定遠・鎮遠等の如きは、宏大堅牢なり。固より東洋無比と称す。我能く死を決して之に当らん。船艙^{じくち}（註し）に衝突し、艦体を毀損せば、則ち其の戦鬪力を失ふや必せり」と。既にして派遣の命を奉ぜらる。大いに喜びて曰く「吾、死力を尽して宿志を達するの時、至れり」と。九月十七日。大孤山洋に戦ふ。諸艦に先んじて奮進し、敵を望みて縦横に突撃す。勢、奔獅のごとし。定遠諸艦、果して戦鬪力を失ふ。之を頃^{しほ}くして敵の流丸、八郎太の身に中^{あた}る。大呼して曰く「進め」と。乃ち斃^たる。一火夫ありて、敵彈の蒸汽管を損するを見る。蒸汽漏泄し、將に速力を減ぜんとす。己の衣を脱して以て之を塞ぐ。汽力峻烈にして、支持すべからず。因りて衣の上より緊抱し、膚肉を以て之を防ぐ。纔^{わずか}に漏るるを止むるを獲。一艦、之が為に感動奮勵し、

遂に大いに奇功を奏す。蓋し其の将卒皆死地に入り、回顧する所なければなり。八郎太死するの時、年四十有一。母氏は年六十余。東京芝区城山坊に寓す。計を得て従容として曰く「国家の為に身命を抛^{なげ}つは、軍人の本分なるのみ。前に首途^{かど}に、已に再会を期せざるを誓ふ」と。

論に曰く「八郎太の用心、以て千古軍人の規範と為すべし。

余、嘗て謂ふ「器械の備は、兵士の精なるにしかず。大艦の寡きは、小艦の多きにしかず」と。

—註—

(一) 船尾と船首。ここでは船そのものをさす。

七、中村敬宇(武蔵)

中村敬宇。名正直。称敬輔。敬宇其号。父曰武兵衛。母松村氏。以天保三年壬辰五月、生敬宇于麻布丹波谷。生甫二歳、就葛馬某、受読四書、就塩田某学筆法。聡慧敏捷、老師皆歎称之。弘化二年丙午。就桂川甫周、講荷蘭書。安政二年乙卯五月。為昌平黌教授。十一月。為甲府徹典館学頭。文久二年壬戌。為儒員、班大番士。三年。將軍上洛、命為侍講。慶応二年丙寅。命留学英国。明治元年戊辰。自英帰、從静岡、為学問所一等教授。五年。上京、奉大蔵省命、翻訳洋書。八年。奉囑託、摂理東京女子師範学校。受月金二百円。十二年。撰為東京学士会員。十

三年。辞女子師範学校。官賞其勞、賜金三百円。十四年。任東京大学教授。受歳俸五百円。叙従五位。十六年。受歳俸一千二百円。十七年。進勅任、叙正五位。受歳俸一千八百円。十九年。任元老院議員、叙従四位。二十一年。薦文学博士。二十二年。選為区会議員。二十三年。兼任女子高等師範学校校長、尋任貴族院議員。二十四年六月。特旨叙正四位・勲四等。賜瑞宝章。是月七日。病没。享年六十。賜祭資一千円。十二日。勅使侍從子爵東園基愛賜幣帛。敬宇嘗設家塾。曰同人社。举国子弟爭入学。又会同志創明六社、発兌雜誌。為人温厚謙讓、不修辺幅。無貴賤一接以誠。雖一書生請写字、不敢拒却。亦未嘗問其報酬何如。尤嗜古文、数百千言立成。而雖一小篇、必関乎人心世道。不事彫琢。而其中必有韻致過人。人推為一時文宗。嘗自西洋帰、大唱洋学。幕人或凶刺之、群来围。為高橋泥舟所救、纔免。稍耶蘇教、安井息軒贈書絶交。後朋友多咎之、終帰正。其葬也從神式。

論曰「敬宇篤実温恭君子也。正直之名、敬宇之号。果不負其实矣。其門人大石秀実・丹羽忠道等皆係予旧知。予因得識敬宇。情交甚親。其家亦相近。旦夕過從、飲酒談噓。不復記予為貧書生。每予著書成、輒作序跋。推奨太過。予不敢当。然予知其非為不情語者也。嘗見予訳出西国歴史地理等、謂「今日言西籍者、君為第一学博。請自今後毎日一時入我室講洋学。閱三年無不成。」余欲從之、終不果。至今為遺憾。耶蘇教主平權自由、先神後人、

不知君父。固属国家大患。而帰其教者、率自正直之人。蓋彼果小信行小義、起乎一心畏神、莫不精誠見面盎背、懇惻接人、故尤能動人也。苟知其不正、則可以鼎正。如敬字是也。可不敬哉。」

中村敬字。名は正直。称は敬輔。敬字は其の号。父は武兵衛と曰ふ。母は松村氏。天保三年壬辰五月を以て、敬字を麻布丹波谷に生む。生甫二歳、葛馬某に就きて四書を受読し、塩田某に就きて筆法を学ぶ。聡慧敏捷にして、老師皆歎じて之を称す。弘化二年丙午。桂川甫周に就きて荷蘭書を講ぜらる。安政二年乙卯五月。昌平黌教授と為る。十一月。甲府徹典館の学頭と為る。文久二年壬戌。儒員と為り、大番士に班せらる。三年。將軍上洛し、命ぜられて侍講と為る。慶応二年丙寅。命を奉じて英国に留学す。明治元年戊辰。英より帰り、静岡に徙り、学問所の一等教授と為る。五年。上京し、大蔵省の命を奉じ、洋書を翻訳す。八年。嘱託に奉じ、東京女子師範学校に摂理す。月金二百円を受く。十二年。撰ばれて東京学士会員と為る。十三年。女子師範学校を辞す。官、其の勞を賞し、金三百円を賜ふ。十四年。東京大学教授に任ぜらる。歳俸五百円を受く。從五位に叙せらる。十六年。歳俸一千二百円を受く。十七年。勅任に進み、正五位に叙せらる。歳俸一千八百円を受く。十九年。元老院議員に任ぜられ、從四位に叙せらる。二十一年。文学博士に薦めらる。二十二年。選ばれて区會議員と為る。二十三年。

女子高等師範学校長を兼任し、尋いで貴族院議員に任ぜらる。二十四年六月。特旨ありて正四位・勲四等を叙せらる。瑞宝章を賜はる。是月七日。病没す。享年六十。祭資一千円を賜はる。十二日。勅して侍從の子爵東園基愛をして幣帛を賜はしむ。敬字、嘗て家塾を設く。同人社と曰ふ。国を挙げて子弟争ひて入学す。又同志を会して明六社を創り、雑誌を發兌す。人と為りは温厚謙讓にして、辺幅を修めず註し。貴賤となく一に接するに誠を以てす。一書生と雖も写字を請へば、敢て拒み却けず。亦未だ嘗て其の報酬の何如を問はず。尤も古文を嗜み、數百千言、立ちどころに成る。而して一小篇と雖も、必ず人心世道に關す。彫琢を事とせず(註2)。而るに其の中に必ず韻の人に過ぐるを致すあり。人推して一時の文宗と為す。嘗て西洋より帰るとき、大いに洋学を唱す。幕人或は之を刺さんと図り、群りて來り困む。高橋泥舟の教ふ所と為り、纔に免がる。稍耶蘇教を愛し、安井息軒、書を贈りて交りを絶つ。後に朋友多く之を咎め、終に正しきに帰す。其の葬るや神式に従ふ。

論に曰く「敬字は篤実温恭の君子なり。正直の名、敬字の号は、果して其の実に負けず。其の門人の大石秀実・丹羽忠道等、皆、予の旧知に係る。予、因りて敬字を識るを得。情交甚だ親しむ。其の家も亦相近し。且夕に過從し、飲酒して談笑す。復た予の貧書生たるを記せず。予の著書の成る毎に、輒ち序跋を作す。推奨すること太だ過ぎたり。予、敢て当らず。然れども

予は其の爲に情語せざる者に非ざるを知る。嘗て予の西国の歴史地理等を訳出するを見て、謂ふ「今日、西籍を言ふ者は、君、第一学博と爲す。請ふ、今より後、毎日、一時、我が室に入りて洋学を講ぜん。三年を閱せば成らざるなからん」と。余、之に従はんと欲するも、終に果せず。今に至りて遺憾と爲す。耶蘇教は平権自由を主とし、神を先にし人を後にし、君父を知らず。^{まこと}固に国家の大患に属す。而して其の教に帰するは、率ね正直の人よりす。蓋し彼は小信を果して小義を行ひ、一心を起てて神を畏れ、精誠の面に見はれ背に盪れざるはなし。懇惻もて人に接す。故に尤も能く人を動かす。苟も其の正しからざるを知れば、則ち以て正しきに帰すべし。敬宇の如きは是なり。敬はざるべけんや」と。

—註—

(1) うわべを飾らないこと。

(2) 文章を飾らないこと。